

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：24201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730708

研究課題名(和文) 反社会的傾向をもつ生徒の「学校へのつながり」を強める環境づくりに関する実践的研究

研究課題名(英文) the observational study of school connectedness for delinquent junior high school students

研究代表者

松嶋 秀明 (MATSUSHIMA, HIDEAKI)

滋賀県立大学・人間文化学部・教授

研究者番号：00363961

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：将来の犯罪抑止のため、少年が学校とのつながりをもつことは重要とされるが、それはどのように成し遂げられているのだろうか？。本研究では、いわゆる「荒れ」た中学校に関わりつつ、入学当初から校内暴力などの問題をひきおこした生徒たちが、3年間という時間のなかで、どのように教師や一般生徒たちとのつながりを築いていくのかを観察した。その結果、「荒れ」の収束には、問題行動をおこす生徒自身への介入もさることながら、一般生徒に働きかけることで校内に豊かな人間関係を築くことが重要なこと、問題行動をおこす生徒を規範でしぼるのではなく、むしろ、信頼関係をもとに「ついていきながら支援」することが重要なことがわかった。

研究成果の概要(英文)：To detect how the sense of “school-connectedness”, which plays an important role to prevent students from future criminal behavior, is constituted within their relatives (teacher, peer, family, etc), 3 years of participant-observation for one junior high school had been conducted. Field notes and the transcription of the interview for schoolteacher constitute the bulk of data. The data are analyzed qualitatively. The findings are as follows: To maintain school discipline, it is as much important to connect with non-delinquent students and cultivate their sense of friendship and confidence for their teachers as to intervene delinquent students' problem behavior directly. To cultivate delinquent students' sense of school connectedness, focused not on their risks but on their strength, empower them are much more effective than forcibly controlling their problem behavior.

研究分野：臨床心理学

キーワード：学校とのつながり 反社会的行動 生徒指導 リジリアンス 実践関与型観察

1. 研究開始当初の背景

わが国の再非行者率は、近年、徐々に増加しており2010年度には31.3%に達した。科学警察研究所の調査によれば、少年は再非行を繰り返す過程で非行性を深め、凶悪・粗暴な犯行をおかすにいたることがわかっており、初期段階での予防的介入が必要とされている(例えば 小林, 2007; 岡邊・小林, 2006)。非行深度が進んでいない少年でも、各人が抱えている病理・障害は深刻なことも多い。例えば、幼少期からの「虐待」が引き起こす対人関係上の問題が注目され、専門家による対応の必要性が指摘される(例えば、橋本, 2004; 藤岡, 2005)。また、広汎性発達障害やADHDといった「発達障害」をもつことと非行との関連が、国内でも多く報告されるようになった(玉井, 2007; 杉山, 2005; 斉藤, 1999)。このほか非行少年の多くに、抑うつ傾向がみられることが指摘され(小保方・無藤, 2005, 2006)、少年の攻撃性の高さは、自傷行為や、自殺とも関連するという報告もある(コナー, 2010; 小野, 2009)。このような研究結果からみれば、問題をおこす生徒は、何らかの生きづらさを抱えている生徒であると考えられる。犯罪の抑止という社会防衛的観点からのみならず、子どもの心身の健康増進を支えるという観点からも非行少年への対応を考える必要がある。

ここで少年の非行化防止のために重要な役割を果たすことが期待されるのは「地域の力」である(小林, 2003)。なかでも伝統的に子どもの社会化機能を担ってきた「学校」の果たす力は大きい。例えば、学校との絆がきれることが非行化の危険因子とされること(Loeber & Farrington, 2001) 学校生活への参加や、非行集団外の友達がいることが保護因子とされること(アメリカ保健福祉局, 2001; 岡邊, 2010) など、少年が大人や仲間たちとの良好な関係を築くことがもたらす効果を示す研究は数多くある。「学校とのつながり(=school connectedness)」とは、このように生徒たちが、学校で出会う大人や仲間達が、自分たちをケアしてくれていると感じることをあらわす概念である。「つながり」を感じている若者ほど、喫煙、飲酒、薬物乱用、暴力、時期尚早な性交などを含む、多くのリスク行動をとらないことがわかっている(Jessor, van den bos, Vanderrinら, 1995; Resnick, Bearman, Blumら, 1997; Crosnoe, Erickson & Dornbusch, 2002; CDC, 2011)。

さて、問題生徒に「学校とのつながり」を形成するうえでは、問題生徒個人と教職員との関係、仲間関係、保護者、教職員の協働といった要因を統合的にとらえる必要がある。先述の通り、問題生徒が抱える課題は、的確なアセスメントを必要とするが、教師は行動化の激しい生徒への迅速な対処におわれて、しばしば生徒の行動のみに目を奪われ、行動の奥底にある心理を的確にアセ

メントすることが難しくなるとされる(羽間, 2006; 小田・羽間, 2005)。それだけでなく、問題生徒の友人関係や、生徒集団との関係がこれに影響をあたえることが予想される。少年の非行化と、その傾向のエスカレートに交友関係が大きな影響を受けることは枚挙にいとまがないが(Willis, 1979; Lightfoot, 1997; 小保方・無藤, 2004, 2006)、問題生徒だけでなく一般生徒もまた重要な役割を果たしていることがわかっている(加藤・大久保, 2004; 大久保・加藤, 2006)。すなわち「荒れた」学校において教師は、一般生徒には厳しく指導するのに対して、非行生徒には緩やかな指導を行なうという「ダブルスタンダード化」が生じやすく、このことは一般生徒に指導の不正感を感じさせやすくし、教師の指導をますます困難なものにするという。一般生徒を含めた指導を考える必要がある。

この他、学校での問題少年への対応には、教員個人ではなく、教師集団として、あるいは外部専門家と連携してのチーム対応が求められる(相楽・石隈, 2005; 浦野, 2001)。保護者の協力が不可欠であるとする研究も数多い(例えば生島, 1997)。保護者は従来、子どもを非行化させた加害者として見られることが多いが、実際には、非行化した子どもに迷惑をかけられている「被害者」としての側面や、子どもを更生させるための協力者としての側面ももち、加害者である側面ばかり強調されるという報告もある(生島, 2001)。問題生徒の立ち直りのためには、保護者の協力が欠かせないが、例えば「被害者」の側面への注目はそのためのきっかけとなる。

このように問題生徒が学校とのつながりをもつためには、1人の問題生徒の背後に、他の問題生徒集団、一般生徒、保護者、外部専門家などの複雑な関係を理解する必要がある。さらに、生徒は入学から卒業までの時間経過のなかで発達しており、それにともなって教師はもちろん、友人、保護者との関係も変化していく。現場に変化を生むためには、こうした諸要因を個別に調査するだけでなく、それらが時間経過のなかでいかに連関するかをみていくことが求められる。

2. 研究の目的

入学から卒業までというタイムスパンのなかで、反社会的問題行動をおこしている生徒と、おこさない通常の生徒、あるいは教職員はどのように関わり、それがどのように学校とのつながりをつくることにつながっているのかを明らかにする。

3. 研究の方法

対象：X 県内の公立中学校1校(以下 A 中学)。この地域では大規模に属する。子育て上のリスクを抱える家庭が多く、生徒指導上の問題がおきやすいとされてきた。

時期：X 年5月からX+2年3月まで、隔

週から月1回、午前10時～15時くらいまでの時間帯に中学校に赴いた。訪問回数は1年次：19回、2年次：15回、3年次：17回であった。教員との1対1でのインタビューは年度末にまとめて行ったが、日頃から廊下や職員室などで随時意見交換を行った。

手法：(1)実践関与的フィールドワークおよび、(2)教師（生徒指導、養護教諭、担任）への半

構造化インタビューをおこなった。(1)に関しては、中学校で日常的に廊下にたむろしたり、職員室に出入りする生徒を中心に、ときには授業に参加しつつ、教室にいる生徒たちとも関わりながら調査をすすめた。生徒に対しては、授業時間中は原則的には教室に入ること、喫煙などの違反行為、暴力などは悪いことであるというメッセージは伝えつつも、制止したり教師に通告したりするなど、積極的に指導に関わることはなかった。また、教師からも、生徒に対応すべき存在としてはみられていなかった。次に(2)については、当該学年にかかわる教員9名に、春休み期間を利用して1時間程度おこなった。このうち生徒指導に中心的に関わる2人には3年連続で、3人に複数年度にわたって聴いた。内容的には「問題」生徒、生徒集団全体のとらえ方を中心に、自由な語りを尊重した。なお、本研究の実施・発表は、研究協力校からの同意に基づいている。

#### 4. 研究成果

3年間の実践関与的なフィールドワーク、および教師へのインタビューをおこなった結果、得られた発見はおおまかに以下の4点にまとめられる。

(1)「荒れ」状況は、授業妨害や暴力など、明示的な逸脱行為をおこす生徒（問題生徒）がそのきっかけになっていた。しかしながら、こうした問題生徒の周囲では、自らは行動をはじめないものの問題生徒がおこした行動に乗じて騒ぐ生徒の存在もあり、そのことが（例えばケンカを制止しようとした教師への対教師暴力が生じるなど）教師の指導を難しくしていることも同時に観察された。また、こうした荒れ状況のなかでは静かに授業に参加するが、学級全体の問題としてとらえ、（教師の助けを求めたり、自主的に問題を解決しようとする働きかけたりといったように）問題を解消しようとするのではなく、むしろ、学級のうるささに不満はもちつつも、自分たちではどうしようもないと感じて関わりあいになるのを避けようとする多くの生徒たちがいた。荒れ状況は、したがって、こうした多様な生徒が互いに相互作用しながら、結果として「荒れ」状況を維持することにつながっていることがわかった。

加藤・大久保（2006）は、荒れ状況が、逸脱行動に積極的にかかわる問題生徒だけでなく、一般生徒からの支持によってなりたっている状況を明らかにしているが、ここまでの

発見はこうした知見と符号する結果といえるだろう。

(2)「荒れ」状況に対しては、教師の「一般生徒を育てる」ことを目標として関わる機会を増やすと同時に、問題生徒を集団のルールにあてはめるのではなく、個別ニーズにあわせた関わりを行った。その結果、問題生徒の暴力行為は減少した。このことを当初は「大人を敵とみていた」ところから、教師が話しかけたり、身体を通して関わることで「ガードしてたものを、知らない教師にも出した」というように、大人との信頼関係が築けるようになりつつあることを成長とみる教師もいた。生徒のなかにも、授業エスケープなどはしていても「暴力はなくなっただろう」といったように、自らの成長として語るものもいた。当初は授業にいれなければと躍起になっていたものも、1時間の授業エスケープを許すかわりに、そこでゆっくりと話をきいてやれば次には落ち着いて授業に入れるといった経験則を発見して、以前の管理的な態度を反省するものもいた。

また、教師たちは学年の雰囲気落ち着いてきた理由として「あの子らを支える周りが成長した」「（荒れを面白がるかわりに「勉強わかるようになりたい」という子らも出てきた」というように）と、非行生徒ではなく、一般生徒の成長によると語るものが多かった。例えば、これまではトラブルがおこっても教師に助けを求めることがなかった生徒たちが、教師を呼びにくるようになった生徒や、大人しい生徒の外面的特徴をひやかしていた生徒の発言をいさめたり、騒ぎを積極的におさめようとする生徒、イジメ的状况を学級全体の問題として解決しようと呼びかける生徒、問題生徒に積極的に友達になろうとして話しかける生徒などがあられはじめた。

(3) (2)のような展開を背景として、2年生の後半になると、問題生徒のなかには、学級集団のまとまりを基盤として、学級に居場所をみつける生徒がでるようになった。例えば、ある生徒は2年生の後半からはほとんど授業エスケープしなくなり、授業中も学級のなかで仲のよい生徒をみつけて楽しんでいるような姿が多くみられるようになった。この生徒は、あるときは教師からすれば問題生徒同士で徒党を組んで行動しているようにみえたが、同じグループとして一括して注意されると「あいつらと一緒にするな」と怒ったりするといったように、問題生徒としてのアイデンティティから距離をとろうとすることもあった。こうした生徒集団のまとまりは3年生になるとますます強固になった。教師のなかには、体育祭や文化祭などで、彼らが目立ち、活躍できるポジションをみつけ、それに誘いこむことで学級活動に引きこもるとしたり、学級をまとめる際にも誠実に役割をこなす実質的なリーダーを育て、苦勞をねぎらいつつ、その一方では問題生徒の発言力

の高さに注目して、彼らをのせることによってクラスの秩序を維持しようとしたり、活気をもたせようとする事もあった。そのことで問題生徒の多くは、学級の目標の達成のために積極的に学校の規則にしたがったり、クラスメートと交流をもとうとすることが増え、そのことが問題生徒の学級集団への包摂をうながしていた。

(4) しかしながら、その一方で、学級のまとまりや担任からの働きかけにもかかわらず、さらに疎外感をつのらせ、次第に校外の非行仲間とのつながりを強める生徒もいた。1年生時代からこれまでのA校に典型的にいる非行生徒と異なり、とりわけ親密な対人関係がもちにくいことが特徴とされることも多く、また、1年生の荒れ状況の解消にも、問題生徒同士の間関係のまずさから一部のメンバーが徒党を組みづらくなったことも起因していたと考えられていた。これに対して、教師は、疎外感を抱えた問題生徒に対して、他校生とのつきあいを抑制するよりむしろ、何でも自由に話せる雰囲気を作ることでモニターしつつ関ったり、学習活動以外の活動への関与させる機会を多くした。と同時に、校舎の補修に誘うといった方法で、授業に入れないアキオに学校活動へ関与させ、手先が器用であるといったストレンクスを見出し、評価した。その結果、アキオは、対人トラブルを教師の助言をかりつつ解決したことで「感謝される」ことの価値に気づくと同時に、自分の将来・進路についての意識を高め、現在の非行的交遊のデメリットを意識化できた。そのことは学校に来ることの意味を再考することにつながった。Gutierrez, Rymes, & Larson, (1995)の「第3空間」の議論をふまれば、学校には教師の統制が行き届いた空間と、そこから逃れようとする逸脱的なカウンター空間がある。授業エスケープし、逸脱行動へと走る生徒たちにとっての「廊下」は、いわばおカウンター空間とみなすことができるが、カウンター空間は、教師の空間の存在を前提としているという意味で、学校を離れれば(つまり卒業すれば)意味のないものになる。その意味で、アキオの将来イメージがふくらんでいくことは、教師の空間と、カウンター空間のいずれにも属さない新しく構成された対象といえる。教師たちとの関わりの場である「廊下」は、さながら両者の「境界」とみなせる。非行生徒への指導とは、教師が互いに相容れないふたつの空間の境界を越えて、どちらにも属さない創造的な第3空間をつくることである。この観点にそうならば、問題生徒の個的な行動改善よりも、集団を育てることによって抱える環境を創ったことや、教師の見方・関わり方が、規範に生徒をあてはめるものから、問題生徒の軌跡に「ついていながらの支援」に変わるなど、全体的布置の創造的変化がおこったことが、中学生の反社会的問題行動の抑止につながっていることがわかった

といえる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 9件)

松嶋秀明. つながりのなかで非行生徒を抱える実践: 警察と学校との協働事例から. 人間文化: 滋賀県立大学人間文化学部研究報告, 33, 2013, pp1-12. (査読なし).

松嶋秀明. 非行問題の介入の基本的視点. 臨床心理学, 13(5), 2013, pp 675-678. (査読なし)

松嶋秀明. 非行少年にかかわる研究実践と臨床実践のインターフェース. 発達心理学研究, 24, 2013, pp 449-459. (査読あり)

松嶋秀明. 非行臨床にいかすりジリアンスの視点」家族療法研究, 30(3), 2014, pp 70-74. (査読あり)

松嶋秀明. 青年犯罪者の共感性を社会的文脈でとらえる-「青年犯罪者の共感性の特性」へのコメント- 青年心理学研究, 26, 2014, pp 29-33(査読あり)

松嶋秀明. リジリアンスを培うもの-ハワイ・カウアイ島での六九八人の子どもの追跡研究から. 児童心理 68(11), 2014, pp 936-941(査読なし)

松嶋秀明. 学校での子どもの暴力問題. 教育と医学 62(11), 2014, pp 982-989. (査読なし)

松嶋秀明. 喪失とリジリアンス. 児童心理 69(2), 2015, pp 157-163. (査読なし)

松嶋秀明. SCと反社会的問題の生徒. 子ども的心と学校臨床, 12, 2015, pp 132-139.

〔学会発表〕(計16件)

Matsushima, H. Dialogical construction of school connectedness for antisocial youth. 4<sup>th</sup> ISCAR conference, October, 3, 2014. Sydney: Australia. (oral presentation, 査読有)

松嶋秀明・高橋菜穂子・遠藤野ゆり・川俣智路・森岡正芳. 逆境にある子どもの育ちの軌跡についていく実践: 教育と社会的養護のクロスロード. 日本教育心理学会第54回大会, 琉球大学, 2012年11月25日(企画者、話題提供者)

松嶋秀明. 「問題」生徒が「学校にいること」が生徒や教師にもたらす意味-ある「荒れ」た中学校でのフィールドワークから(1). 日本教育心理学会第54回大会, 琉球大学, 2012年11月24日"

森岡正芳・山本智子・川俣智路・松嶋秀明・赤木和重. ナラティブ研究の基本的視点-当事者の視点と分析者自身の記述-. 日本発達心理学会第24回大会, 明治学院大学, 2013年3月13-15日(話題提供者)

川俣智路・小野善郎・保坂 亨・田邊昭雄・松嶋秀明. 移行支援としての高校教育 思

春期の発達支援から、新たな高校教育のパラダイムを模索する。日本発達心理学会第24回大会，明治学院大学，2013年3月13-15日（指定討論者）

松嶋秀明. 学校の落ち着きは「問題」生徒と教師になにをもたらずのか-ある「荒れ」た中学校でのフィールドワークから(2). 日本発達心理学会第24回大会，明治学院大学，2013年3月15-17日

松嶋秀明. 「問題」生徒はいかに学校とつながりあえたか -ある「荒れ」た中学校でのフィールドワークから(3). 日本教育心理学会第55回大会. 法政大学 2013年8月17日（ポスター発表）

松嶋秀明. 「問題」生徒はいかに学校とつながるのか-ある「荒れ」た学校での実践関与的観察から」日本心理学会第77回大会. 北海道医療大学. 2013年9月19日（ポスター発表）

松嶋秀明. 社会的に交渉されたレジリエンスとしての「立ち直り」. 日本発達心理学会第25回大会. 京都大学 2013年3月21日（ポスター発表）

青山征彦・香川秀太・岡部大介・益川弘如・有元典文・菊地美和子・香川秀太・澁谷幸・山本直美・鈴木ひとみ・南部由江・中岡 亜希子・三谷理恵・田中亮子・石田喜美・松嶋秀明. 実践と介入をめぐる：可能性、困難、研究者のありかた 日本質的心理学会第10回大会 立命館大学 2013年8月30日(指定討論)

岡本直子・安田裕子・松嶋秀明・荘島幸子・能智正博. 臨床心理学と他領域の架橋としての質的研究 日本質的心理学会第10回大会 立命館大学 2013年8月30日(話題提供)

安田裕子・サトウタツヤ・松嶋秀明・森直久 シンポジウム「文化心理学、活動理論、TEMによるケース・フォーミュレーション豊饒化の試み 日本心理学会第77回大会. 2013年9月21日北海道医療大学

安田裕子・サトウタツヤ・松嶋秀明・西垣悦代・森岡正芳(2013). 企画シンポジウム「対人援助の教育実践 - 学び手の語り(ナラティブ)と行為(アクション)をむすぶ、協働(コラボレーション)を促す - 」対人援助学会第5回大会. 2013年11月9日、立命館大学

安田裕子・サトウタツヤ・廣瀬太介・廣瀬真理子・松嶋秀明. 企画ワークショップ6「ひきこもりの家族支援 - TEMによってシステムに接近する試み - 」対人援助学会第5回大会. 2013年11月9日、立命館大学

松嶋秀明・川俣智路・高橋菜穂子・有元典文. ラウンドテーブル「生きづらさをかかえる子どもの支え方を再考する」. 日本発達心理学会第25回大会. 2014年3月21日、京都大学（企画・話題提供）

黒田真由美・石井英真・原田三朗・蒲生諒太・松嶋秀明ラウンドテーブル「教師の共同的

で深い学びを促す校内研修」日本発達心理学会第25回大会. 2014年3月23日都大学（ファシリテーター）

〔図書〕(計5件)

茂呂雄二・有元典文・青山征彦・伊藤 崇・香川秀太・岡部大介. ワードマップ 状況と活動の心理学 コンセプト・方法・実践 2012, 331 ページ(pp.161-164). 新曜社.  
田中康雄. 児童生活臨床と社会的養護 2012, 280 ページ(pp.225-229). 金剛出版.  
やまだようこ(編) 多文化横断ナラティブ：臨床支援と多声教育. 2013, 280 ページ(pp.196-234). 編集工房レイヴン  
日本青年心理学会(編). 新・青年心理学ハンドブック, 2014, 714 ページ (pp.196-234). 福村出版.  
マイケル・ウンガー 『レジリエンスを育てよう』(松嶋秀明・小森康永・奥野光、共訳) (Ungar, M. (2006) Strengths-Based Counseling with at risk youth. Corwin Press, Thousand Oaks, Ca )2015, 208 ページ東京：金剛出版.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

松嶋秀明 (MATSUSHIMA Hideaki)  
滋賀県立大学・人間文化学部・教授  
研究者番号：00363961